

研究成果報告（概要）

氏名	角倉マリ子	所属・職 (成果報告時点)	日本国際詩人協会 代表理事
----	-------	------------------	---------------

【研究テーマ】 港湾の詩学—回帰すべき地点—

【研究成果】

「港湾の詩学：回帰すべき地点」は現代活躍する詩人による共同研究としては先例がなかったが、呼びかけに応じて全国の詩人が郷土の港の詩を寄せた。そこから検証したところの現代人の港湾の心象は、 港湾の回帰性・待望性・自由性に着目したものである。そして人間と海とのつながり、港と生活、情緒性が強く見られたのも、海洋国日本の特徴であると捉えた。1. 港湾の心象（イメージ）については、港湾は築港から成熟していく生命体であることが詩人の発想から得た。また、世界の港湾は一つでは成り立たず、地域性を優先するばかりでは、港湾のクオリティを高めていくことにならず、港湾のトポスを確立しながら、物流と人の流れのダイナミクスのなかで優れた港湾を整備する必要があること。2. 港湾と人間の営みについては、昨今港湾や海にたいして若い世代が無関心となっていることを認識し、危機意識を持つべきだと考える。次代に与える知恵も知識も無きに等しく、港湾教育の必要性を認める。港湾の仕事が自動化されていけばいくほど港と街との隔絶が生じる。アムステルダムのロッテルダム港、海洋博物館のように広報・啓発が更に必要である。「海の日」「成人の日」など港湾や会場を舞台にイベントを提案する。3. 港湾と旅について。また、地中海クルーズはフライト&ボードという空港と港湾の接近で成功している。これは客船誘致の鍵となること。寄港地での効率よく、魅力的なプログラムも必要である。クルーズは年寄り、金持ちのものをいう日本人の持つイメージは払拭しなければならない。客船でニーズが高まれば一泊あたり一万円という格安クルーズも可能であり、家族連れの旅、若い客層にも配慮する料金設定が期待される。

本研究では、「港湾」を通して、経済・地理・歴史・文化・科学・文学などに知識を深めることができることが分かり、これをツールとして港湾文化を確立できたことが大きな収穫であった。

【成果の活用】

研究報告書として

- (1) 「港湾の詩学—回帰すべき地点」「港湾の詩学—詩人の港・詩人の海」を日本国際詩人協会より出版した。
- (2) 「港湾の詩学—回帰すべき地点」「港湾の詩学—詩人の港・詩人の海」を日本国際詩人協会よりアマゾン・キンドル（電子）出版した。

また

- (3) 詩論「回帰の詩学」を「スペイン学第4号」（京都セルバンテス懇話会）に掲載された。
- (4) エッセイ「それぞれの港湾小景」は有馬敵全集に収録予定。
- (5) 詩集「回帰の作法」を招聘詩人ラファエル・ソレルを日本国際詩人協会より出版した。
- (6) 「大津京歴史散歩」を予定するなど、大津港などの琵琶湖水運、瀬戸内水運の歴史を学ぶ動きが会員より出てきている。